

いくぶん（この雑誌にとって）私的な回想から始めよう。二〇〇四年の春から一年間、【The end of the Literature 文学の、終り目的】と銘打ったシリーズがあった。柄谷行人「近代文学の終り」から始まった、遠い昔にも思えるその企画は、結局のところ、私たちがよく見知った、そして（ポスト・モダン」という名の遊戯も含め）永遠に続くかに思われていた「近代」と呼ばれる時代の曲がり角に、その落とし子であり生みの親でもあった「日本近代文学」——それこそが、現存最古の文芸雑誌としての「早稲田文学」の並走してきた歴史でもあるわけだが——の踊り場を（それが何合目かの平地なのか、それとも終着点かという問いとともに）見いだそうとする試みのひとつだった。

もちろん終わりは目に見えるものではないし、一朝一夕に行われるものでもない。まして「近代文学の終り」がきわめて繊細にそれを語っていたように、特定の誰かが宣言する類のものでもない。けれども、ネットワーク・テクノロジーの普及によって世界が様変わりしてゆくこの十年を経て、「近代文学」が行使していた機能と枠組みがかつての効力を失いつつあることは、いまや多くの者の目に——とりわけデジタル・ネイティブと呼ばれる世代には——明らかだろう。

だが、それが「文学」の終わりを意味するものでないことも、むしろ言うまでもない。枠組みが終わろうとする瞬間にこそ、終わることのないその中心目的が、当然の存続を信じていた時代には忘れられていた「文学とはなにか」が、くつきりと浮かび上がる。「近代文学」から「近代」の拘束衣をはずすこと。あるいは、それ以前との比較において「近代」なる時代の特質」とされてきたもののなかに、その以前と以後とを問わず通底するもの——現実に訪れた「ポスト・モダン」においてなお失われぬもの——を見いだすこと。そこにこそ「文学」があり、その「中心目的」があり、未来がある。

ならば、いかにして「近代」の拘束衣を解除するのか。無数の試行錯誤とともにあるだろうその方法のひとつは、「近代」と不可欠に結びついた「国民国家」の枠組み、「日本近代文学」の「日本」をはずすことだ。ネットワーク化した社会の情報やりとりにおいてすではずれつつあるその枠を、文学においても積極的に解除すること。すなわちそれは、「日本文学」を「世界文学」へと書き替える道筋を求めることにほかならない。

ここからのシリーズ特集「日本 現代文学の、標的「始まり」」では、すでに「世界文学」とされている日本の現代作家と作品を辿る（それがどのように受容され、あるいは受容されざるも含め）ところから、その手がかりを探すことになる。一方では受容の様態を、他方では作品そのものを、国内の、そして国外の書き手／読み手たちが重層的に読解してゆくことで炙り出されるものはなにか。その模索の先に目指すのは、もちろん、「日本文学」としての作品が、そこから生まれることにほかならない。

シリーズ特集「日本 現代文学の、標的「始まり」」では、今号の第一回で大江健三郎（一）、次号の第二回で大江健三郎（二）& 村上春樹（一）……と、扱う作家が重なってゆきます。大江健三郎、村上春樹、あるいはそのほかの現代作家についての国内外からの気鋭の投稿もお待ちしております。メールで whinfo@bungaku.net までにお送りください。採用させていただく場合はメールにてご連絡いたしますので、氏名（本名）も忘れずに記載ください。